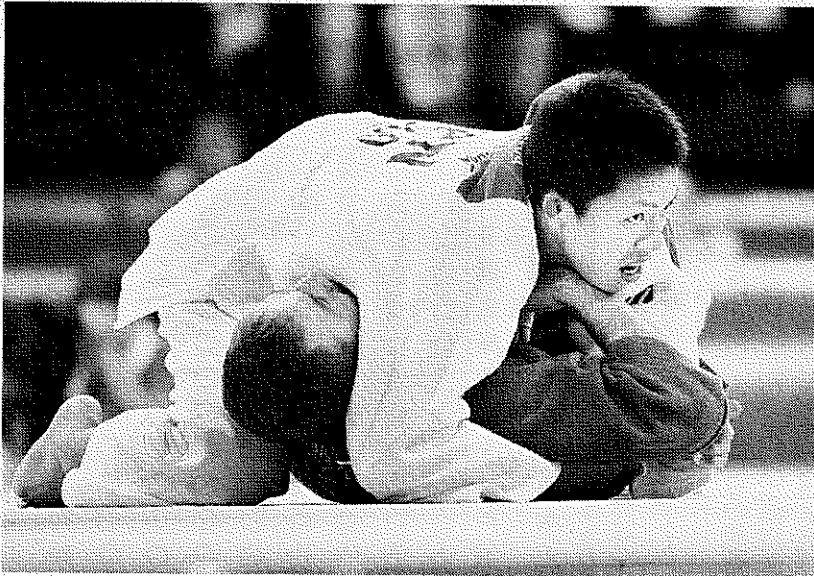


駆ける魂

柔道男子60⁺級 野村 忠宏 (35歳) ㊤



五輪3連覇と息の長い王者になった(04年8月、アテネ五輪柔道男子60⁺級決勝)

「執念」と刺しゅうされた黒帯をキュツと締め、相手をにらみつける。一分でもスキがあれば懐に飛び込み、あっという間に裏返しにして畳にたたきつける。胸のすくような正統派の柔道。それが野村忠宏(ミキハウス)だ。

父の野村基次は名門・天理高(奈良)柔道部監督、叔父は72年ミュンヘン五輪の軽中量級の金メダリストだ。母の八詠子も競泳で東京五輪の代表候補だった。地元ではちょっと知られたアスリート一家の次男として育った。

野村が中学生時代、初めて組んだ細川伸二(現天理大教授)は「さすがサラブレッドだ」と驚いたのを感じている。50⁺にも満たない小さな少年なのに「技の

父譲りの正攻法、忠実に

スピード、タイミング、入り方。ちょっとした動きも全然違う」。ロサンゼルス五輪の60⁺級金メダリストをうならせた。

祖父が始めた「豊徳館道場」(奈良県広陵町)で、父が教えた技は3つ。右の背負い投げ、左の一本背負いに小内刈りだ。

結果の出なかった天理高時代。手っ取り早く勝つためにと、当時流行し始めていた組まない柔道を試した息子に、父はこう諭した。

「今は勝てなくてもいい。本当に息の長いチャンピオンになりたいのなら、ちゃんと組んで、正攻法の柔道をしろ」

忠実にその教えを守った成果が、五輪3連覇だ。30年以上をかけて、試行錯誤と熟成を繰り返した背負い投げ。右のつり手と左の引き手をつまく使って体をもぐりこませ、最後は下半身

背負いのキレ 取り戻す日々

を思い切りボーンと跳ね上げるように伸ばして、体全体で巻き込みながら背中からたたきつける。一連の動きが一本の線であらう。だからこそ、キレは生まれる。

同じく背負い投げを得意としていた細川は「体を高く入れても、低く入れても自由自在。あれが本当の背負い投げ」と評する。

内またや大外刈り、裏投げなどのバリエーションは20歳を過ぎてから、けがを生ずるたびに身につけてきたもの。野村という柔道家の核をなすのは、あくまでも背負い投げだ。「背負いのキレは、僕の柔道とイコール」

2年後のロンドン五輪を目指し走り始めた野村には、取り戻したい感覚がある。背負い投げを打った瞬間に感じる、肩の力が抜けたような快感だという。

「相手を担いでいる感覚